

第 29 回欧州病理学会に参加して

大 崎 博 之*

はじめに

私は、国々で個性が異なる欧州が好きで、2~3年に一度の割合で欧州細胞学会か欧州病理学会に参加しています。今年は欧州細胞学会が開催されなかったため、欧州病理学会(European Congress of Pathology)に参加しました。今回の学会は、2017年9月2日から6日までの5日間にわたってオランダのアムステルダムで開催され、主催者発表によれば100カ国から3,099人の病理関係者が参加したとのことでした。今回は一人での学会参加でしたが、示説発表のため大した緊張もなく関西国際空港を飛び立ちました。

I. アムステルダム到着

関西国際空港からアムステルダムのスキポール空港まで約12時間のフライトでしたが、直行便であったため疲労は感じませんでした。スキポール空港はトランジットで何度か利用しましたが、程よい大きさで案内板なども分かりやすく、また美術館などもあり大好きな空港です。空港からは電車でアムステルダム市内まで移動しましたが、車窓から見えるビルなどはまさに「ダッチデザイン」で、日本ではお目にかかれない前衛的な建築物に退屈することはありませんでした。東京駅のモデルとなったと言われているアムステルダム中央駅を出ると、目の前の運河と自転車で移動する人の多さにアムステルダムに到着したことを実感しま

した。また、街を歩いているとしばしば独特な臭いがしました。初めは何の臭いか解らなかったのですが、これが大麻の臭いでした。オランダは大麻が合法の国で、若者などが街を歩きながら普通に大麻を吸っていますし、コーヒーショップ(大麻を提供している店)の前では特に強烈な臭いがして気分が悪くなるほどでした。しかし、アムステルダムの町並みは美しく、公共交通機関も整備されており大変気に入りました。

II. 学会発表

会場となっていたRAI コンベンションセンターは、目の前にトラム(路面電車)の駅もありアクセスしやすく便利でした。受付を済ませてポスター会場に行くと、参加者の多さに驚きました(写真1)。今回の学会では、午前9時30分から10時30分までポスターセッション以外のスケジュールは組まれておらず、この時間帯に会場にいる参加者全員がポスターセッションを見に来ていました。今まで参加した学会では、ポスター会場は閑散としており、自分の発表時間帯にポスター前に立っていても数人の参加者に質問される程度でした。そのため、私の拙い英語で何とかなっていたのですが、こんなに大勢の参加者が来ることを知り、一気に不安になりました。また、ポスター会場では当日発表のポスターが貼られているのはもちろんのこと、当日以外のポスターについてもE-posterで閲覧できるようになっていました。

*神戸大学大学院 保健学研究科 病態解析学領域 ohsaki@people.kobe-u.ac.jp



写真1 ポスター会場

今回の発表の演題名は「Urinary WT1-positive cells as a non-invasive biomarker of crescent formation」でした。内容としては、腎疾患患者を半月体形成があるグループと半月体がないグループの2群に分けて、それぞれの腎生検と尿中におけるポドサイト(WT1陽性細胞)の出現数を比較した結果、半月体形成があるグループでは尿中のポドサイトが有意に多く、我々の考案した検出法を用いれば非侵襲的に半月体形成の検出ができるというものです。上記の発表内容は、すでにCytopathology誌にAccept済みでしたので、どんな質問がきても大体は答えられるとタカをくくっていましたが、多くの参加者がポスター会場に来ることを知り、発表当日までの2日間は毎朝ホテルで1時間ほど上記の論文を音読していました。

発表当日、自分のポスターを貼っていると、座長の先生(スイスの女性病理医)がやってきて様々な質問を受けましたが、音読の成果で何とか答えることができました。その後も何人かに質問を受けましたが、座長の先生の質問内容に比べれば簡単な内容だったので落ち着いて対応できました。

発表後、担当者から「Best posterに選出されたので最終日の夕方にE-poster前でもう一度口演するように」と言われましたが、帰りの飛行機の時間に間に合わないため泣く泣く辞退しました(涙)。

III. 情報収集

分子標的薬ができて以降、コンパニオン診断としての病理の役割が大きくなりました。特に肺の非小細胞癌では、学会の度にEGFRやALK、ROS1などがトピックとなってきましたが、今回の学会ではPD-L1花盛りでした。しかし、一方で「Liquid biopsyの時代になっても形態学には形態学の役割がある」という内容の発表もあり興味深く聴講できました。

いつも国際学会に来て思うことは、中国や台湾など日本以外のアジア人は英語が下手だろうがなんだろうが堂々と大きな声で発表していることです。お国柄や文化の違いですが、私を含めて日本人も見習うべき点だと思います。

IV. アントワープ観光

アムステルダムには、アンネフランクの家やゴッホ美術館などの観光名所があります。しかし、今回私がどうしても行きたかったのは「フランダースの犬」のネロとパトラッシュが最期を迎えたアントワープのノートルダム大聖堂です。アムステルダムからベルギーのアントワープまで普通電車で2時間半ほどの距離でした。到着したアントワープ中央駅は今まで見た駅の中で最も美しい駅で、国の重要文化財に指定されていることも納得でした(写真2)。そこからノートルダム大聖堂までは徒歩で移動し、アムステルダムとはまた違う美しい町並みを堪能しました。ノートルダム大聖堂は外観も素晴らしかったのですが、中に入ると本当に荘厳な雰囲気で、私のような人間でも心が洗われる感覚でした。また、絵心のない私もルーベンスの絵画をネロの気持ちになって鑑賞しました。今回の出張中に日本人と会うことは少なかったのですが、ノートルダム大聖堂だけは多くの日本人が訪れていました。フランダースの犬はイギ



写真2 アントワープ中央駅

リス人の著者が書いたもので、ベルギーでは本が出版されてなかったそうです。しかし、あまりにも日本人がノートルダム大聖堂にやってくるので、ベルギーでも話題となり本が出版されたそうですが、内容が悲劇的過ぎるということで不人気だそうです。これもお国柄と文化の違いですね。

おわりに

私が国際学会に参加する目的として、発表や情報収集はもちろんですが、学会場や Gala dinnerなどで有名な先生方と知り合いになれたり、観光や美味しい食事を楽しんだりすることも目的となっています(写真3)。私の場合、勉強だけでなくそのような楽しみがあるからこそ「また国際学会で発表するために研究をしよう!」というモチベー

写真3 クロアチアの学会で仲良くなった
イタリアの病理医と再会

ションにしています。まだ国際学会に参加したことがないという若い方がいれば、ぜひその楽しさを経験して、研究や語学学習のモチベーションにしていきたいと思います。